

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 新年度に向けて ……1
- カンボジア現地報告 ……2~3
- ラオス報告会in鎌倉 ……4
- ネパールのスペシャリストに学ぶ参加型ワークショップ ……5
- あーすフェスタかながわ2013 ……6
- 安井清子さん「モン族とラオスのお話」 ……6
- 気仙沼だより その5 ……7
- 動きはじめた「未来の食卓」 ……7
- 活動日誌 ……7
- INFORMATION ……8

新年度に向けて

5月25日に開かれた総会で、新年度の計画が承認され、新しい活動がスタートしました。2013年度は理事の改選期に当たるため、3名の理事が退任し、新たに3名の理事が加わりました。続投が決まった丸谷士都子理事長に新年度の方向性について聞きました。



——ますます経済が優先される社会で、地球の木が目指すものはなんですか？

地球の木のテーマは「分かち合う暮らし」です。経済力のある国が世界の資源や安い労働力を利用して、環境や良い伝統を破壊してしまうような仕組みを問題としています。アジアそして日本で、人と人、地域と地域のつながりを大切に、持続可能な暮らしのあり方を提案し、今ある自然を次の世代とも分かち合うことができるようにしていくことです。目指すのは「心の分かち合い、経験の分かち合い、未来の分かち合い」です。

——海外プログラムに何か変化はありますか？

ラオスでは、調査と準備をしてきた大型家畜銀行が実施されます。ネパールではマンガルタール村の隣村での体制



国内活動：安井清子さんの講話会開催



海外支援：プログラム評価に参加するネパールの女性たち

が整い、活動地が広がります。カンボジアでも、自然染色のスカーフを織ってくれた新しい村で生産者グループの立ち上げの準備をしています。このほか、新しい支援の形として複数のプログラムへの少額の支援を検討し、新たなつながりを築いていきます。

——国内活動はどんなところに力を入れてやっていきたいですか？

出前講座は、これからの食を考える「未来の食卓」やネパールの事例を元にした「声なき人の声とは」などのワークショップを広めていきたいと思っています。今年は地球の木講座に加え、国内スタディツアーも計画しています。

もうひとつテーマとしたいことは、「多文化共生」です。様々な理由で日本に住んでいる外国籍の人びとにとって、とても住みづらい状況があります。地球の木は「あーすフェスタかながわ」や「ともだち展」などに積極的に関わってきました。より多くの人に現状を知ってもらうための学習会などをおこなっていききたいと思います。

——会員の皆さんに何かメッセージをお願いします。

スタートから22年目を迎えた地球の木は、組織の改編も含め、様々な展開を模索していきます。いろいろな媒体を使って、皆様への情報の提供にも努めてまいります。これからもご支援をよろしくお願いいたします。



カンボジア現地報告

急激な社会変化の中で

朝の出勤風景

ミシン教室

3月初め(3/10~3/13)、調査と商品開発をかねて、カンボジアを訪れました。タケオの訓練センターに着くとなにやら賑やかな声が聞こえます。ショールームの隣の部屋を覗いてみると、20台ほどのミシンがぎっしりと並んでいて、高校生たちが大勢来ているのです。話を聞いてみると、隣にある学校からの依頼で、ミシン教室のために部屋を賃しているのだといいます。センターに来ていた訓練生たちの中にも、そのミシン教室へ通っている子がいます。10年前に日本のNGO「Love & Peace」がこのセンターを作った時、裁縫教室もありました。地球の木もセンターへの支援を始めた2005年当時、その裁縫教室でデザインや技術のアドバイスをおこないながらクラフト製品の生産、販売をしていました。しかし、織物の盛んなタケオで、裁縫は織物に比べてあまり仕事にならないため、生徒たちの人気もなく、また指導する先生の確保も大変なためその裁縫教室は終了となったのです。それが今、ミシン教室ができてたくさんの生徒たちが通っているのを見て、少し戸惑いを感じました。



タケオ職業訓練センターにできたミシン教室

プノンペン開発ラッシュ

首都プノンペンでは、アパートやホテル、モールなど商業施設の建設ラッシュが進んでいます。市街地が拡大し、工場が郊外にもどんどん建設されています。軽工業が中心のため、縫製工場も多いです。「ファストファッション」と呼ばれる大手アパレル企業をはじめ、グローバルに展開する企業が、「世界の工場」中国から、より安価な労働力を求め、ベトナムそして、バングラデシュやミャンマー、カンボジアなどの新興国へと生産地をシフトしている中で、どんどん新しい労働力が必要になっているという背景があります。タケオの訓練センターは幹線道路から比較的近いところにあるので、工場関係者がこの学校に話して、ミシン教室を作ったのかもしれない。



遠方からはトラックに相乗りして通勤



プノンペンには大きな工場が建てられていく



交通渋滞も激しいプノンペン

どんどん変わる人々の暮らし

タケオの農村でも、経済発展が進む中で、なにかにつけて現金が必要になっているという現状があります。訓練センターの近くも電気が通るようになりました。しかし電気はただで使えるわけではありません。電気代の支払いや電気製品の購入など、そして、テレビのCMで消費意欲はさらにかき立てられ、人々の暮らしはどんどん変わっていくのです。工場の労働者たちの賃金は、月に50ドル程度だそうですが、実際に少女たちは縫製工場働くことで家族へお金を送り、そして自分も携帯電話や流行りの服を手にすることができるようになります。ただし、労働環境や搾取など懸念される問題も多々あります。

止められない時代のながれ

少女たちが田舎で家族と共に暮らし、伝統的な織物を織るという選択をせず、流行の洋服を大量生産する工場の労働力として都会へ働きに出るというのは、時代の流れで、それを止めることはできません。日本の私たちもその道を歩んできました。また、訓練センターがカンボジアの人たちの手で有効に活用されるのは、センターの自立の一步としても歓迎されるものですが、カンボジアの社会の変化はあまりに急激で、取りこぼされていく貧困層の女性たちなど、弱い立場の人たちのことがとても気にかかります。



夜もにぎやかなプノンペン市街

“Oyabu didn't come?”

タケオの訓練センターに、スレイリスという少女がいます。地球の木のメンバーで、いつも織りの専門家として同行してもらっている大藪さんの話では、織る手つきがとても「しなやか」だそうで、センスのある素敵な柄のスカーフを織る子です。とても恥ずかしがり屋で、初めは、なかなかそばに寄ってきませんでしたが、「褒め上手」な大藪さんの指導で、目を見張るように織りも上達し、カンボジア語の通訳を通じてですが私達の呼びかけにも、はにかみながら答えるようになってきました。ところがこのスレイリス、私が3月にセンターを訪れたとき、いつものように挨拶した後、私の横にすっと来て、「Oyabu didn't come?」と話したのです！「いつの間に英語が話せるようになったの?!」と思いながらいろいろ話しかけてみると簡単な受け答えができ、何とかコミュニケーションができるではありませんか。考えてみれば彼女たちも学校で英語を習っているのです、不思議がることではないのだけれど。それでも私たちと話がしたいと思って頑張って英語の勉強をしてくれたのなら、こんなステキなことはない。それとも、いつまでたってもカンボジア語を覚えられない私達に業を煮やして「私たちが……」と思ってくれたのかも。一生懸命考えて話したのかな？と思うとそれもまた愛おしくてたまらない。一年に何度か訪問するだけの「外部者」である私たちに何ができるのか？いつも自問を繰り返しているが、こんな風に少女たちによる刺激を与え、いろいろなことが出来るようになるお手伝いができているとしたら、何よりである。特に英語の習得は、彼女たちの将来の選択肢を大きく広げる可能性を持っている。ただ、最初の一言が“Oyabu didn't come?” だったとは。



自分の織ったスカーフを持って



スレイリスの織は皆のお手本

そんな信頼されている大藪さんが羨ましいかぎりである。

(クメールシルクチーム 筒井由紀子)

JVCラオス現地スタッフによる "ラオス報告会" in 鎌倉 (4/12)

今回熱の入った報告をしてくれたのは、JVCのラオス事業を担当している平野さん、ラオスの現地事務所から代表のグレンさん、農業リーダーのフンパンさん、森林担当のホンケオさんです。

切り拓かれるラオスの森

ラオスでは、外国産業植林会社（ベトナム、タイ等）が村の共有林を50年、70年という長期にわたり政府からリースし、切り拓いてユーカリやゴム、キャッサバイモ、サトウキビなどのプランテーションにする。その規模はラオス全土で2005年に50万ha、今では200万haを超すという。樹齢百年以上もの木が切られ輸出のため運び出される写真は、痛ましいばかりだ。あるいは植林すると言いつつ、海外向けの高級

家具用の木材（特に紫檀など）の伐採目的で森に入る企業もあると聞く。村人が食糧を得る焼畑農業のために、近くの森を手斧で開墾するのは前時代的な環境破壊としながら、片方で大規模な伐採はどんどん増えているという矛盾……

こういった「開発」による村人の暮らしへの影響も大きい。より遠くの森へ食べ物を探しに行かなくてはならなくなり学校にいけない。自給自足が難しくなり食料も買わなければならなくなる。そのため出稼ぎに行く人が出てくる、などである。また、自分たちの森が狭くなると今度は隣村との境界線問題に発展してしまうなど、対企業のみならず、住民同士でも土地問題が多発し、行政などに訴える事案も増えている。そういった行動を起こした村人たちが拘留されたりすることが近年おきているそうだ。そんな中JVCの活動も、政府への配慮をしながら行う必要が出てきている。



イラストカレンダーを使い土地の権利を村人に学んでもらう



報告会后和食を楽しむホンケオさん

ホンケオさんの村では—— 住民不参加の開発？

初来日のホンケオさんはパワフルで笑顔のすてきな若い女性。JVCの活動報告に加えて、彼女の出身村で起こった実際の話をしてくれた。その村はJVCの支援村ではないため、ホンケオさんが自分の持てる力を発揮して個人的に村人を応援している。

突然村に道路が通ることになったと告げられ、郡のブルドーザーがやってきて家をつぶされたり、移動するようと言われたりした。移動するようといわれた家は、ラオスの高床式の家で、何と20人ぐらいの隣近所の人が出て、よいしょと土台を持ち上げずらしていきのた!! その家主は、「みんなに手伝ってもらったお礼に御馳走をふるまわなくてはいけない。大散財だったのに何の補償もないのよ!」と怒っている。他にも田んぼや養魚場もつぶされ、しかもその道路は、村人に役立つ道路とは言い難いらしい。行政側からは何も村人に説明がないままで、また何の補償も行われていない。ホンケオさんは、JVCで学んだいろいろな法律や権利を村人に伝え、村人たちは郡の役人たちに何度も掛け合ったが、国の発展のためには土地を差し出すのは当然だろうという態度であつたらしい。

村人が望んでいるのは、自分たちの未来については自分たちで決めたい、政府の開発に村人も参加したいという至極当然のことだ。一党独裁で民主主義がまだ根づいていないラオスで、少しでも村人に行政や企業と交渉できる力をつけてほしいと、JVCは住民への意識付けや法律研修などを行っている。フンパンさんも、まだまだ時間がかかることであるが、必ずやらなければならないことと決意を語ってくれた。

(ラオスチーム 中野真理子)



報告するJVCラオスのメンバー 左端がフンパンさん



立ち退きを命じられ家を移動する村人たち

7年ぶりに想うラオスの村

—ラオス報告会に参加して—

小林 喜美子 (会員 横浜市)

話を聞き終えて心に浮かんだのは「物事はそう単純に上手くはいかないものだなあ。支援する側も辛抱と根気で携わっているのね。そして（それでも）ラオスの村の人たちは（私たちも）一日一日生きていく」という思いでした。

2006年のラオス・スタディツアー参加から7年弱経ちました。当時は色々な支援が急激に増え始めた時期だったのでですね。その頃行われた支援のその後の話や政治体制の現状を聞くと、他にも沢山の人が涙を飲む場面があるのが想像されました。7年前、私は単純に、「ラオスのゆったりしたおらかさ」に憧れ、訪ねた村では想像以上の「人の心と自然の豊かさ」を感じました。それらの思いを今も宝物として持ち続けていますが、それだけでは済まされない現実があるのを再認識した報告会でした。



ネパールのスペシャリストに学ぶ 参加型ワークショップ

3月24日（日）、かながわ開発教育センターとの共催で参加型開発について学ぶワークショップを行いました。講師のカマル・フヤルさんは「開発とは幸せを分かち合うこと」をモットーとし、ネパールをはじめ世界各地でNGOや国際機関、政府機関の仕事をしている参加型開発のファシリテーターです。地球の木がネパールで行っている「幸せ分かち合いムーブメント」はカマルさんとの出会いから始まったものであり、現地でも多大な協力をして下さっています。

今回、カマルさんがご自身の博士号授与式のためにご夫婦で来日されるということから、ぜひ博士研究の成果を活かしてワークショップをしてほしいという期待が関係者の間で高まりました。同時にカマルさんの方からも、地球の木の皆さんへの感謝の気持ちとしてネパール料理を作ってお馳走したいという申し出がありました。そこで、第一部をワークショップ、第二部をネパール料理教室と懇親会として開催することになり、約20名の参加者が集まりました。



カマルさんご夫妻にネパールカレーを習う

第一部のワークショップは「参加を促す技」というテーマで行われました。まず参加者全員が円になって座り、ネパール語の伝言ゲームをすることから始まりました。最初の言葉とのおまりの変化に大爆笑が起こりましたが、聞き取ることの難しさを実感した一コマでした。次に、3人ずつのグループに分かれ、自分にとってコミュニケーションを「しやすい」「難しい」「楽しい」を挙げていき、その理由を全員で考えました。自分自身の日頃の人間関係を振り返りながら、よいコミュニケーションのために必要なことは何かを考えました。

次に、開発に関わる人々の関係性を考えるためのロールプレイを行いました。カマルさんが参加者一人ひとりに次々と、国際ドナー、現地政府、地方政府、国際NGO、現地NGO、ファシリテーター、開発ワーカー、住民などの役割をあてがっていきます。そして、通常の開発がいかに住民からかけ離れたトップダウンで行われているかということや、本来は住民からのボトムアップの開発が重要であること、そのためには誰がどうすればよいのかといったことを全員で話し合いました。その上で、参加を促すファシリテーターは、技術や知識と共に、何より人々の参加を促すための気持ちや態度が重要であることを確認しました。最後に、実際にネパールやタイでカマルさんが関わってこられた住民参加型開発の現場の様子をビデオで見せていただきました。

参加者の一人が、「カマルさんのワークショップはとてもシンプルだと思った。だから参加者はいろいろな質問したくなる。参加を求めるとは情報は与えすぎない方がいいと思った」と感想を述べていましたが、本当に次々と参加者から質問が出てきて、一人ひとりが大いに考え参加したワークショップでした。そして、第二部のネパール料理教室は、本場のネパールの家庭料理の味を堪能しながら、とても楽しい交流の時となりました。カマルさんご夫妻、ありがとうございました。

(ネパールチーム 磯野昌子)



本場のネパールカレー



あーすフェスタかながわ2013

本郷台あーすぷらざ 5月11～12日

地球の木が立ち上げから関わり、主催団体のひとつとして参加しているあーすフェスタ。初日はあいにくの雨だったが、翌日はそれを補うかのような人出で、屋外の屋台村（地球の木は子午ミ販売）、屋内の様々なプログラムが活気づいた。

その中で、「様々な国籍や文化を持つ県民が集い、それぞれの文化や考え方をアピールし、理解し、共に生きる社会を実現する」というフェスタの趣旨そのものを考える「外国籍県民フォーラム」が、日本で暮らす外国籍の人など6人のパネリストを迎えて行われた。

在日21年のフィリピン出身の女性は、介護の仕事では外国人に対する偏見も経験したが持ち前の明るさと、人との出会いが自分を育ててくれたと話した。「自分は笑顔で日本に溶けこんできたが、皆さんは新しい環境に溶けこむときどのようにしていますか？」と尋ねた。会場からは「相手を知る。他の意見を尊重すれば、相手も自

分を尊重してくれる。自分から積極的にコミュニケーションをとる」などの答えが返ってきた。

またオーストラリア人の父、日本人の母を持つ青年は、多文化共生に対する両国の政策の違いを説明しながら、「自分にとっての多文化共生とは和である」と言い切り、「和」が尊重されているはずの日本で余りそれを感じられないが、どのように共に生きる社会を実現していったらいいのかと質問を投げかけた。会場の若い人たちから「一人では生きていけない。友達が大切。相手がいることで成長できる。相手を思いやる気持ちが大事」などの意見を引き出した。

神奈川県には17万人もの外国籍の県民がいるというのに、彼らが何を考え、どのような思いで暮らしているのか、あまり知られていない。このような場があることを知って、もっと参加してほしいと司会者は結んだ。

（会報作成チーム 浜辺美英子）

安井清子さん 「モン族とラオスのお話」

（5/25 新横浜オルタナティブ生活館）

地球の木総会の後に開かれた講演会。40名を超す参加者たちは、安井さんのお話に関心しました。難民キャンプでモン族の子どもたちに絵本を見せることから始まった安井さんのモン族と関わる活動は、もう30年近くになります。最初は絵本の絵を指差しながら「ダッチ？」（モン語で「何？」）安井さんが唯一知っていた言葉）と繰り返して質問し、答えてくれる子どもたちの言葉から徐々にモン語を習得しました。いろいろと工夫しながら自然に子どもたちと心を通わせていく様子は実に見事です。文字を持たないモン族の口承の民話を消滅させてはならないと老人たちの語りを録音し、子どもたちに聞かせたり、民話を題材にした刺繍の絵本作りなど、モン族の暮らしにそった図書館活動を続けました。「モンの村に長期滞在してみて初めて、彼らの感覚が理解できた」という安井さんは、同時に村の誰もから仲間として受け入れられたのだと思います。

見せていただいたスライド写真やビデオのモン族の子どもたちは、どれもとびきりの笑顔です。「大人たちが

畑に行っている間に子どもたちは、水汲み、焚き木とり、豚のえさやりなどできばきと働き、生きる力を身につけていきます。しかし、昨年山の村にも電気が入り、彼らがぼおっとTVを見ている姿があります。経済優先の社会で、彼らは弱い立場になってしまうでしょう」という話が気にかかりました。

モン族の子どもたちに「いろいろな世界にふれる機会を与えたい」と現在2カ所の村とピエンチャンの自宅横にて図書館活動をされていますが、その影響は子どもたちだけではなく、図書館に関わってくれている女性たちにも及んでいるそうです。「モンの女性たちも力をつけてきています。図書館を通じて世界が広がり、新しい人生を歩き始めるきっかけになっているのです」と安井さんは最後に嬉しそうに話されました。

（会報作成チーム 沼田由美子）



モン族の話をする安井さん

気仙沼支援報告

気仙沼だより その5

僕の移動販売「ありすボックス」

今回は気仙沼市の「ありすボックス」を紹介します。私達は、東日本大震災後、IVY気仙沼の活動の一つであった移動販売のメンバーでした。2011年7月に、仮設住宅の建設が始まり、今後何が必要か考えました。阪神大震災の教訓のもと「コミュニティの形成」「見守り支援」を行なおうと考えました。当時 必要のこと不便なことが沢山あった被災地では、仮設住宅に移動した際の心配ごとの一つとして、物資がなくなり、食事をどうするかも問題でした。車も流され、バスも走っていない状況。お店も殆ど閉まったままで買い物に行くことも出来ない。私達は「コミュニティの形成」「見守り支援」を行うためのきっかけとして、老若男女関係なく必要とする「食の支援」として移動販売を行い、「コミュニティの形成」と「見守り支援」を同時に行っていました。

この移動販売は、利用者が多く、高齢者や、小さな子どもがいる主婦等たくさんの人達に集まっていただき、同時にお茶会をすることで、コミュニティの形成を行ってきました。仮設住宅に伺った際、一軒一軒声をかけ、見守り支援も行いました。

利用者同士で、頂いたものや買った物等を物々交換をしている場面等を見たとき、一番コミュニティの大切さを感じました。



大峠山仮設住宅にて野菜の販売をする

2012年3月にIVY気仙沼が解散しましたが、続けてほしいという利用者の声があり「ありすボックス」を設立し、移動販売を継続することにしました。

現在、仮設住宅20カ所以上に毎週伺い、「声かけ」「お茶会」「移動販売」を行っております。

震災から2年以上がたった現在でも、交通が不便なため買い物に行けない利用者がいます。私達は、今後も必要とされる限り活動を続け、また、今後のため新しいことにもチャレンジしながら、気仙沼市の復興のために頑張っていきたいと思っております。皆様、応援、宜しくお願いたします。

(Tree Seed 小野寺大志)

※「ありすボックス」は、地球の木が応援しているTree Seedのメンバーの小野寺さんが個人的に始めた移動販売です。現在、多くの仮設住宅に住んでいる方々に重宝されています。

動きはじめた「未来の食卓」



かながわ湊フェスタでのワークショップとファシリテーターの山崎さん

昨年の夏、開発教育協会のワークショップ「地球の食卓」に参加して以来、出前講座チームでは、私たちの食のあり方を見直し、地球にやさしい地産地消の暮らしを推進する、地球の木らしいワークショップを作りたいと、挑戦を繰り返してきました。

12月のなか区民活動センターでのデビューを皮切りに、3月10日には伊勢佐木モール「りせっとカフェ」で、「未来の食卓～お米が食べられなくなる日が来る?!」、さらに、5月26日(日)には横浜駅近くの沢渡公園で開催された「かながわ湊フェスタ」でもワークショップを行いました。

参加者の方々は、「今まで『食』のことをこんなに真剣に考えたことはなかった!」「フードマイレージや地産地消など初めて知った。とても学ぶことが多かった」と目を輝かせていました。「ワークショップに参加して、なんだか世界が変わった!」と言う高校生もいました。

(出前講座チーム 乳井京子)

活動日誌(3月～5月抜粋)

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|---------------------------|
| 3月3日 | ネパール評価報告会(県民センター) | 12日 | ラオス報告会(鎌倉NPOセンター) |
| 5日 | 第10回理事会 | 19日 | ボランティア説明会 |
| 9日 | デポー展示会(東戸塚) | 19~20日 | デポー展示会(日限山) |
| 10~13日 | カンボジア訪問 | 23日 | 監査 |
| 20~24日 | 展示会(あざみ野スペースNana) | 30日 | 第13回理事会 |
| 21日 | 第11回理事会 | 5月 | |
| 22日 | ボランティア説明会 | 11~12日 | あーすフェスタかながわ2013(本郷台) |
| 23日 | 地球の木カフェ@スペースNana | 14日 | 第14回理事会 |
| 24日 | 地域で活かそう!PRA(アートスクエア木月・中原市民館) | 24日 | ボランティア説明会 |
| 27~28日 | デポー展示会(のぼりと) | 25日 | 第14回地球の木総会 |
| 29日 | 地球の木カフェ期末セール(事務所) | 26日 | ワークショップ「未来の食卓」(かながわ湊フェスタ) |
| 4月11日 | 第12回理事会 | | |

Facebook始めました！

Facebookからイベントのご案内や報告などを発信し、地球の木の皆さまにより知っていただくことから、地球の木の“ファン”をもっと増やしていけたらと思います。皆さま、ぜひ、地球の木のFacebookページ、

<https://www.facebook.com/chikyunoki> にアクセスして、👍 “いいね！” をよろしくお願いします！

※ Facebookの検索から“chikyunoki”を検索、または、地球の木のホームページ右上の  Find us on Facebook からアクセスできます。



「ラオス森の絵本」制作に向けて 田島征三さんのこのごろ

田島征三さんは、絵本はもちろん現代美術の様々な作品を生み出し、グローバルに活動しています。田島さんとお付き合いいただいてかれこれ4年！になりますがそのバイタリティには本当に驚かされます。廃校をまるごと絵本にしてしまった「絵本と木の実の美術館（新潟県十日町市）」は、開館から4年を経て、今も進化し続け地域の拠点となっているようです。また現在は小豆島など、12の島々を舞台にした「瀬戸内国際芸術祭2013」に参加。ハンセン病国立療養所のある「大島（香川県高松市）」で、元患者さんたちが暮らしていた建物を使って作品を展開中です。元患者さんたちからは、「芸術祭をやってくれてよかった。生きている証を示せた」との声があったそう。これも田島さんの、そこに住む人々との信頼関係の賜物なのでしょう。

“夏には必ず見に行くぞー！”

(ラオス森の絵本実行委員会 武安ますみ)

瀬戸内国際芸術祭：春、夏（7/20～9/1）、秋（10/5～11/4）の3シーズンに分けて開催。

詳細は

「もったいないを国際協力に！」 ご協力ありがとうございます。

3月の会報誌でお願いした「もったいないを国際協力に！」に約30名の皆様から、はがき、切手、テレホンカード・QUOカードなどと、たくさんのご協力をいただきました。

ちりも積もれば山となる……皆様のお気持ち、大切につかわせていただきます。送っていただいた皆様には、今回の会報誌にお礼のカードを同封させていただきました。今後とも引き続き、ご協力のほどよろしくお願いします。



お手元に届いた会報誌55号いかがでしょうか？

支援地や国内活動、イベントの写真を掲載するたびに、これまでの一色刷りではせっかくの美しい写真も余り見栄えせず、残念な思いをしてきました。皆様にきれいな写真を見ていただきたいと話し合い、今回の会報誌はカラー刷りにしてみました。ご感想をお寄せいただければ幸いです。

(MH)

地球の木オリジナルグッズが続々登場

ご購入・お問合せは地球の木事務局まで

ショッパーMINI

蚊帳を重ね合わせたバッグです。丈夫で雨に濡れても少々の重い物を入れてもOK。お弁当入れなどのセカンドバッグとしても大活躍。横30cm×縦25cm 幅14.5cm 10色 各¥3,900



BCバッグ

見る方向により色が違って見えるカンボジア独特な織りをバッチワーク風にしたシルクのバッグ。（黒は完売のため製作中です）A4サイズも入ります。横29cm×縦33.5cm 4色 各¥4,000



シルクのカードケース

カードケースに名刺入れに、suicaやPASMOなどのケースとしてもお使いいただけます。横11cm×縦7.5cm 3色 各¥1,300 リング付き¥1,400

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。また、神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。